

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第191号（2022年4月）



白井啓治

（三十）春の移ろいの中に

（2009年4月2日）

『花冷えが春に待てと叱ってくれた』

そんなに全力疾走に春の訪れて、去ることはないだろうに。そう思ったのは私だけではないだろう。3月中に桜が満開になって、花吹雪の舞いを見せられたらどうしようか、と春を褒める覚悟のまだ出来ていない吾身を案じていたのであったが、花冷えのおかげで、春が足踏みをしてくれた。しかし、足踏みの所為で、他の心配事が生まれてしまった。ちよつと早いのがこんな陽気が暖かいのだから種蒔きをしよう、と何種類かの種を蒔いたのはいいのだけれど、蒔いた途端花冷えが降りてきて、連日庭の畑に霜柱が立ってしまった。芽はちゃんと出てくれるのだろうか。

10日程前になるが、我が百姓の師であるふたば自給農園の松山有里さんの所にジャガイモの植え付けの手伝いに行ってきた。ジャガイモは多少の寒さが来てもダメになる心配は少ないが、それとも限度というものはあるだろう。

ジャガイモという根菜は、寒さよりは暑さに弱い

ものらしい。うる覚えに記憶しているのが、定かなことではないが、ジャガイモの葉は気温が25度を超えると枯れてくるらしい。考えてみると、ジャガイモの原産地はアンデスの高地であるから暑さには弱いのであろう。昨年は、ジャガイモの出来があまり良くなかったそうであるが、短い春から一気に夏になってしまったことの影響なのであらう。



（絵： 兼平智恵子）

未だ種蒔きはしていないのであるが、今年もオクラを育ててやろうと思っている。食材としてのオクラもさることながら、黄色の花が夏の朝によく似合う。昨年、庭に育ててすっかり気に入ってしまった。オクラの原産地はアフリカだから、種蒔きにはまだ少し早い。

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

木下明男 090-4715-5527 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東弓子 0299-26-1659 木村 進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0014 石岡市国府 4-3-32（木村）

HP <http://www.furusato-kaze.com/>

しかし、百姓ほど自然と共存しながらのスリリングで創造的な仕事はないだろうと思う。自然を相手に、ある種の賭けごとのような緊張感があり、偶然性に委ねるような陶芸的な美的感動を与えてくれる。60歳を半分過ぎて始められる職業ではないので、庭に小さく楽しみ、体力と相談しながら師匠の手伝いに出かけるので満足するしかあるまい。

（本稿は故白井啓治氏の常陽新聞に2008年7月より約1年間に亘って掲載されたエッセイを載せています。）

常世の国の朗読物語『奴賀比売物語』

兼平智恵子

写真に見る石岡の昭和史研究会出版「いしおか昭和の肖像」によりますと、「石岡の自然の中で、柏原池から龍神山を望む風景ほど変貌したものはないだろう。標高二一〇mだった龍神山は現在では碎石で中央部がなくなり、標高一六三mに縮んでいる。当町（旧石岡）の西端にして、染谷村上（現、染谷地区村上地区）に跨る。四時（四季）の風光すこぶる絶佳にして、一度その山嶺に登らんか。」筑波山の山頂、男体山と女体山に似た形になってしまった龍神山は筑波山に連なる山で各所に巨岩が露出している。巨岩は筑波山の東方に分布する古生層に属し、主に粘板岩から成りたっている。二つに分かれてしまった龍神山には、佐志能神社が祀られてあり、右側の村上に雄龍（村上佐志能社、雌龍が左側の染谷の方に（染谷佐志能神社）住むといわれ、共に、里の人によって龍神（雨乞いの神さま）として厚く信仰されてきました。この里に伝えられている物語が今回ご紹介します奴賀比売物語です。



常世の国の朗読物語

奴賀比売（ぬかひめ）物語

二〇一七年五月二〇日発行

著者 白井 啓治

表紙絵 兼平智恵子

発行 ふるさと風の会

奴賀比売物語 前文をご紹介します。

朗読 白井啓治 手話舞小林幸枝

語り 「今は昔。」

それは古墳時代は中後期頃のお話です。その頃はまだ府中ではなく、この地方は茨城の里と呼ばれており、龍神山も村上山と呼ばれておりました。この村上山の麓に広がる村は村上千軒と呼ばれており、たいそう大きく豊かな村でした。

この村上村から西へおよそ一里半ほど行ったところに、片岡村という部落がありました。その部落の外れに奴賀比古（ぬかひこ）と奴賀比売（ぬかひめ）という兄妹の夫婦が住んでおりました。兄妹が夫婦だなんて、と眉をひそめる方もおられるかもしれません。だが、その当時は兄妹の夫婦は驚くようなことではありませんでした。部落間の交流も少ない小さな里村などでは、叔父と姪、叔母と甥の夫婦や時には父と娘、母と子が夫婦の契りを結ぶこともあり、それが禁断の関係という感覚も意識も全くなく、ごく自然のことでありました。美男美女の比古と比売はい夫婦で、何をするにも二人一緒におりました。さて、これからどのようなことがお二人の間におこるのでしょうか……。ふるさと風の会文庫「奴

賀比売物語」をお楽しみ下さい。



で 社 神 能 志 佐 上 村
さん さ 小 小 舞

尚この物語は石岡市史上巻に伝説、「晡時臥山の蛇」として、晡時臥山（くれふしやま）は、村上、染谷にまたがる龍神山の古名である。として語られています。また最初にご紹介しました「四時の風光すこぶる絶佳にして、一度その山嶺に登らんか。」に誘われて、のぼって見ました。

さくさくの落ち葉と巨岩と
闊いながらの村上の山へ。
急ななぼり、滑りながら約
三十分。頂上です！
うわ！絶景かな、絶景かな
常世の国を見渡せる！
そしてそこには水を湛えた
硯の形をした石、その水を
飲むと中風にかからないと
いう「硯石」には残念ながら湛えた水は確認出来
ませんでした。急斜面ありで要注意です。そして
もう一つ気になっていたことが。碎石された跡は
どのようなになっているのか……。木々の間から見
おろす！なんとブルーの小さな湖があらわれました。
岩石からの贈り物。すでに十年位前のことですが、
現在のはどのようなになっているのでしょうか。



是非是非石岡の名所の一つにして欲しいと願っています。

参考資料 石岡の歴史と文化

○ 戦火の人とコロナの猛威を思い

さくらのアーチをいく

智恵子

我が人生の回想3

木下明男

入社式

ハルが来た、卯月・・・新規就職の季節です。メディアが彼方此方の入社式風景を映しています。そんなニュースを見ながら、60数年前を思い起こしています。学生服姿で、母と共に常磐線南千住駅から、京浜東北線を乗り継いで大井町駅で降りる。駅から光学通りを歩く事10数分、紅白の幕が飾られた入社式会場に到着。200名を超す応募者から選ばれた、30名の同期生。其の殆どが丸刈り学制服姿、まるで高等学校の入学式の様です。会場には社長をはじめとする幹部、3年間お世話になる教官（技術指導者）たち、そしてみんな父兄（殆どが母親）同伴です。同時に入社したのは、数名の高卒者と大学生です。

1959年、学んでいた中学校では進学率50%くらいでした。地方から東京に向く集団就職の盛りの時期でもありました。大手の製造会社では、自社で技術者を育成する制度（技能者養成所）があり、中卒卒業生を高校と同程度の教育を行っていました。（学校登録していた会社もあったようです）ここで3年間の、普通教育と専門技術を学

びそれぞれの職場に配属されるのです。私は光学大手精密会社に就職をしたのです。進学志向はあったのですが、父親が店を持たない果実行商（零細以下）と言う職業で、親子7人を支える状況で（5人兄弟）学校へ行ける経済状態ではなかったからです。2つ上の兄も、就職組で（その後夜間高校大学を卒業し、工業高校の教師）3つ下の妹と二人の弟は、二人の働き手が増えたことで進学することになりました。

就職と共に夜間高校に通い、大学を目指したのですが、苦手な英語を克服できずに断念をしたのです。学校を卒業した私は、自由時間を謳歌したのですが（飲酒、麻雀等々）そんな時期に職場での人間関係が壊れる、経営者からの組合分裂が起き生き方を変えさせられたのです。そして、サークル活動の一環として、労音に誘われたのです。労音運動（良い音楽を音楽を広める活動）は、「良い音楽を安く多くの人々に！」企画運営は会員の手で！「国民音楽を育成創造する！」地域活動です。この活動に集まってくる多くの若者は、それぞれの職場での悩み等を語り合い、生き方について学びました。スキーやスケート、ハイキングやキャンプ、正に歌って踊って恋をする健全な若者たちの集う場でもありました。真剣にサークル活動を広げるため集う若者は、当然のように生き方を学び、泣き笑い怒り・・・丁度此の頃TVDラマで流行った「若者たち」そのものの世界に浸りました。50年以上も昔の話です。

新年度を迎えるにあたり、新しく社会に参入する若人をみて、遙か昔を思い起こしました。成人年齢も下がり、混沌とした社会を生きていく若者たちに、どのようなエールを送れるか悩む日々を

送っています。

地域に眠る埋もれた歴史（79）

木村 進

【常陸国における親鸞の足跡】（5）

報佛寺・嘆異抄作者唯円の開基の寺

歎異抄の著者。報佛寺は河和田城跡にある。親鸞ゆかりの寺として大洗の願入寺を紹介しましたが、もう一つ水戸市河和田にある報佛寺も紹介しないといけないと思います。



場所は赤塚駅から1.5kmほど南で、偕楽園の3kmほど西側です。歴史に詳しい人はこの河和田（かわわだ）というと戦国時代の「河和田城」を思い浮かべるかもしれません。

この報佛寺はこの河和田城があった場所に水戸光圀が移築して整備したようです。その前は更に南側の国道50号線辺りにあったようです。

いまでもそこには石碑が置かれているといいます。歴史から見ると、北条（つくば市）の多気山に城

を構えていた多氣の大掾（だいじょう）氏がつくばにて勢力を持っていた「小田氏」の換言により源頼朝に鎌倉に呼び付けられて失脚させられてしまいました。その後この水戸にいた多氣大掾と同じ常陸平氏一族の吉田氏（馬場に居を構えていたので馬場氏ともいう）に大掾職が引き継がれました。この吉田大掾氏がここ水戸の水戸城と常陸府中（石岡）の役所との間を行き来して常陸国の官職を行なっていました。しかし、常陸府中で行なわれた「青屋祭」に出かけている留守をねらって「江戸氏」が水戸城を占拠してしまいました。

それから吉田大掾氏は石岡が本拠地になりました。この河和田城の城主この河和田氏は吉田大掾氏の家臣ですが、水戸城と共に江戸氏が支配してしまっています。この河和田城もかなり広くこの報佛寺から北は河和田小学校や天徳寺辺りまでを含むエリアだったようですので、かなり重要な家臣の一人だったのだと思います。

しかし、この後に入った江戸氏も佐竹氏に敗れ、戦国末期は佐竹氏が支配していました。

寺の入口には、「法喜山泉溪院 法佛寺」と書かれています。山門は東日本大震災で倒壊し、修理再建したものだと思います。

山門を入った左側に親鸞像？が置かれています。右側の小山の上に鐘楼が置かれています。

このような山門脇の小山は恐らく昔の城の遺構であると思われます。小山を築いて見張りなどを配備したのでしょうか。親鸞像の近くの参道わきに「天牌奉安所」という石碑が置かれています。

この天牌が誰のものかはよく分かりません。

そのまま正面に本殿が見えますが、本殿前に大きな木が聳えています。しだれ桜です。

春には綺麗に咲くので、この辺りの名物になっているようです。額田にある真宗の「阿弥陀寺」もしだれ桜が有名でしたが、同じ真宗のこの寺もしだれ桜が有名なのだそうです。

水戸市河和田にある報佛寺は親鸞の直弟子「唯円」が建てた寺です。唯円は「歎異抄」を書いた人物とみなされています。

『善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人をや。』このフレーズもいろいろに解釈されそうですね



その真中に「唯円大徳開基」と書かれた石碑が置かれています。

建保6年（1218）榎本というところにある心字池のほとりに（現在地の少し南側の国道50号近く）道場が建てられ、その後竹ノ内に移り寺は「泉溪寺」と称した。元禄3年（1690）に水戸光圀が

現在地に移し、荒れていた寺を再建したといえます。本堂脇の隅に「報佛寺の十字名号」と書かれた石碑が置かれています。

「河和田に平次郎という信仰心の薄い男がいた。女房は親鸞聖人の教えをうけ、十字の名号を紙に書いてもらって拝んでいた。平次郎はそれを誤解し、女房を刀で斬って埋めてしまった。ところが不思議にも女房は何事もなく、十字の名号が斜めに切られていた。このため平次郎は改心し、聖人の弟子となって名を唯円と改め、報仏寺を開いたと伝わる」この親鸞が書いたとされる「十字名号」は今もこの寺に残されており寺宝となっています。さて、この話に似た話が石岡にもあります。「聖跡御経塚」と市内本浄寺の寺宝として伝わる掛け軸「袈裟懸け名号」です。

共に頑張ろう

伊東弓子

この頃、婆さんの歩きが軽くなった靴（あかぎれ）がなおったようだ。痛快・痛快、ついこの間迄は大変だった。靴が痛いといって歩くのが辛そうだった。それ以上に惨めな姿だった。年のせいで膝が痛み出し、今迄クッションになって自然に動いていた脚が棒のようだし、靴の痛みで足がしつかり土につかないのだろう。

「いづみ、待って待って」と、ブレーキをかけることが多い。最後には怒り声になってくる。冬の

初めに手入れをしなかったから酷くなってしまったと言っているが、ここ二三年、三々四人の友からアドバイスを貰っているのに、一向に学ぼうとする力がない。頭が弱いのか、自分を大事にしていない。身から出たさびだ。

俺は“いづみ”という雄犬です。よろしく。

婆さんと一緒に暮らしを始めて八年になる。高浜のいづみ荘の町内附近をうろろしていた時、婆さんと二人の孫にくっついてきたのがこの家。ふるさと“風”に載せてもらうのは二度め、話題になる程の者ではないが・・・。

一日は、朝の散歩から始まる。今年は土手の土の様子がおかしい。ぶかぶかで土が崩れるところが多い。冬草の根がしつかり張っていないのだ。除草剤をまくからか、根っこまでだめになっているんじゃないか。また草刈りの時、きれいにしている積りかもしれないが、土塵を巻き上げて土の中まで草刈りをしている様子をよく見る。あれでは根っこまでだめになっているんだよ。人間は何を考えているんだかと、婆さんはぶつぶつ言っている。土の所を歩くのは俺にとってはいい気持。ましてや雪が降った時は嬉しかった。あの“サク、サク”という音と感触、また降ればいいなあ。

この所溜息をつく婆さんの淋し気なこと。知り合いや友がいなくなっていることを嘆いている。婆さんばかりじゃない、俺だってそうだ。

筑波山の見える堤防下の犬、大きくて優しい姉さんみたいだった。台の方でよく会ったけれど、今はいない。お婆さんも外に出ないのか会わない。初めて見つけた彼女、すぐ近くの家だが、この頃会わない。木々に囲まれた家、庭にいた若いお母さんに聞いてみると「弱っちゃってね」とのこと。

諦めてしばらく寄ろうとしなかったが、気になって婆さんを引っ張って行ってみた。あんなに素直だったのに日当たりのよい所をよたよた歩いていた。お前も年とったか、と近づいて力づけてきた。高浜の大きな黒も死んだ。響くような声で挨拶してくれてた。三々四年前まで堤防でよく会った。お母さんって感じの犬にも暫く会わない。離れた所から庭先をふらふら歩いているのが見えたが、まもなく亡くなったという。なんかわからないが時々寄ってみたいくて庭に尋ねていく。何でいきいたのか、そういえば、おじさんがいつも飴を一ヶくれたっけ。

婆さんは歩きながらよく話をしてくれる。この地域の歴史や四季の移り変わり、天気の様子、一日だって同じではない。そんな中で生かされている人間、俺達動物も生かされている。でも、人間って特に自分中心に生きている。着る物も被る物も必要以上だ。俺達毛皮一ちよう冬、夏では多少寒さ暑さに合うように出来ている。この頃、犬も洒落た服を身につけているものもある。当人の意志ではないだろうが、人間にそこまで左右されたくないねえ。婆さんの都合で歩くこともある。配り物をしたり、挨拶に行ったり、途中で会って長話になったり楽しそうだ。その間、俺はずっと待ってやる。「待ってくれてんの、お利口だねえ。賢こそうだね。お話しわかる」とほめてくれるが、俺を覚えてくれて俺中心に声かけてくれる何人かはいる。それは嬉しいことだ。遠くから「いづみ、おーい、元気か」「いいね、婆ちゃんと散歩いいな」とか「暫く振りだね、いづみちゃん」家につながれているだけでは、こんな喜びはない。婆さんに感謝、かんしゃ。

話しの中に二ツ三ツ面白い話があった。
一、「スーダッタ」の話し

靴（あかぎ）が痛い頃、長靴をはいて出かけた時、昔、スーダッタと呼ばれていた人がいたんだよ。村の役職を持っていた人だけど、あまり身なりを気にしない人だったの。長靴風の古い靴をはいていて足を引きずるようにあるいていたので、周りの人が「スーダッタ」って呼んでいたの。本人は知っていたのかどうか。

二、「ちんちん、かもかも」の話し

少し下品に聞こえるかもしれないが、貧しい時代には隠居をつくるなどは、一般の人には考えられなかったが、偶には隠居もできた。仲良し同士が集まって賑やかにやっている内はいいが、あつちの爺さん婆さんが旨い物でも食べてたのか、お喋りでもしてたのが噂になって、そんな言葉も出来たとかいう。

三、「木小屋」の話し

ここは木を集めて置いた小屋だよ。山を背した道端に大きな小屋がある。毎日毎日火を焚くから、落葉、枯草、小枝、大枝等は一寸前までは必要だった。子供の頃大人達が酒飲みの席で必ず出てくる歌の一つだった。手拍子で、又箸で皿や茶碗を鳴らして拍子を取り、唱っていた中に、こんな歌があった。何度もうくり返し唱っていた。

“ハ、おらが若いときや、木小屋が宿で

木小屋ヨ、木だらけ、アリヤサ、紙だらけよ、よーい、よーい、よーいとなつと”

木の回りに紙があつて火がついたら危ないのにと、その頃はおかしな歌と思っていたが、この年になるとなんとなくわかるような気がする。

ばあさんはよく出かける。小川へ、文化センタ

「へ、お寺へ、石岡へと忙しい。」「ごめんね。行ってくるね」と、必ず言うが、自分だけ出歩いてるのが羨ましい。つながれての身は哀れなもんだ。一寸前に機会を狙って逃げ出した。四メートルくらい丸太に繋がれた朝、婆さんは右に曲がって坂を登って行った。よし後をついて行くぞという気持ちで動いてみたら少し動いた。一寸苦しいが動いた。その意気で十字路を曲がって坂を登ったが、次の小さな十字路の立木の切り株に引っ掛かって動きがとれなくなった。すぐ近くの畑にいたおじさんに元へ連れ戻されたが、「こんな重い丸太を引っ張って道路を渡ったのか、何事もなくてよかったよ」と、涙を流さんばかりに事故の無かったことを喜んでくれた。婆さんも甘いね。二度目の脱走はブロックに繋いで出かけて行ったときのことだった。重さも巾も丸太の時とは違うから動きやすかった。どこでどうなったかわからないが、綱が切れて、ブロックもはずれ軽くなった。

何てすてき、自由の気持ちよさ、一日歩き回り夕方近くになるとさすがに木も咎め、家路を急いでいた。仕事帰りの兄ちゃんの車が通った。俺に気がつかなかったか、こんな思いを一日彷徨っていたのに、婆さんは俺を見て喜んでくれたが「ブロックは・・・という」そんな物覚えていない。夕方は道向こうの爺さんが散歩に行ってくれる。夕方の散歩も色々な面がいい。

俺の落ち着く所は何ヶ所もある。天気によったり、婆さんの都合によることもあるが、俺も主張することも多い。玄関横の小屋、道路沿いの土手、桜塚の荒地、寝床、それぞれいい場所だ。

俺の寝床から台所が見える。夕食の仕度をしてる婆さんの様子がよく見える。柄にもなく丁寧で

時間がかかっている。高浜のお婆さんが時々持つてきてくれる大小の骨、うまい。明日も食べられるかな。楽しみだ。居眠りしながら時々目を開けると、飲み食いしている。「うん、自分だけ」と、よくよく見ていると、視線を感じるのか、肉の端くれをくれる。うまい。兄ちゃんの仕事を見ていると一区切りつくとも必ず、一寸したものをくれる。自由の利かない身なれど、優しい人に囲まれて、四方山話を聞いて広い世界を知ることが幸せだ。これからも元気でいこう。婆さんも元気でいこうよ。

いづみ タベとつても素敵なテレビを見たよ。阿蘇山の野焼きの様子、大自然の営み、牛と人のかわり、とてもよかったよ。冬、牛舎で暮らしていた牛たちが喜びを全身で表わして大草原に飛び出していく姿、あれが本当の姿だろうと感動したよ。大きな体が大きく揺れて自由に向かっていく、いづみも自由がほしいよね。「いづみ、少しでも綱を長くしてあげるね」と・・・後は夢心地で聞いていた。「それから牛たちは丘の傾斜を枯草を踏んで、青草を踏んで走っていく。牛道という長い長い線が交叉することなく描かれていく様も素晴らしい。いづみが土手の傾斜を歩く姿と同じだった。・・・あとは聞こえない・・・」。



笑い閻魔

小林幸枝

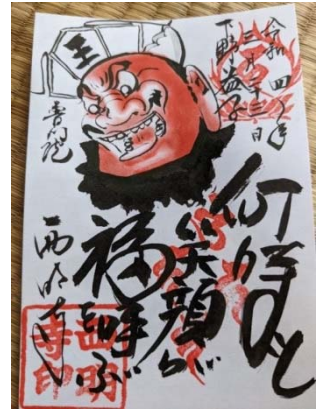
栃木県益子町にある「西明寺」には、「笑い閻魔」という珍しい像が安置されています。そこで、その像を見学して、ご朱印を頂きに行ってきました。閻魔さまの像は、その名の通り笑っていました。ここは、自然に囲まれた境内には国指定重要文化財の建造物が3つあります。この自然と歴史に彩られた「西明寺」をご紹介します。



西明寺（正式名称は「獨鈷山普門院西明寺」は、真言宗豊山派に属し、坂東三十三観音第20番、下野三十三観音第13番に位置する札所です。また下野七福神の札所でもあります。天平9年（787年）、行墓によって創建されたと伝えられており、本尊は十一面観音菩薩です。

本堂へは、参道の石段を登って向かいます。私も足元に気を付けてながら頑張って登りました。ただ運動不足のせいでもかなりキツかったです。石段を登ると楼門があります。明応元年（1482年）に建立された室町時代の建造物で国の重要文化財に指定されています。楼門の左右の側室は前後に区切られており、前室には阿形（右）と吽形（左）の像が置かれており、顔は怖くて逞しく男らしく

見えます。



楼門の左側には、三重塔があります。

これも天文12年（1545年）に建立された室町時代の建造物で国の重要文化財に指定されています。三重塔の屋根は建築技術の高さに驚かされています。境内にある茅葺き屋根の建造物は、閻魔堂です。堂内には、閻魔大王、善童子、悪童子、奪衣婆、地蔵尊の五体の仏像が安置されています。格子窓から閻魔堂の内部を覗くことができ、これが「笑い閻魔」と呼ばれる像で、閻魔様の顔は笑っているようです。今回とても珍しい像をみることができました。

閻魔様は、お地藏さん（地藏菩薩）の化身と言われており、「他人のためなら地獄にも行く」というお地藏さんは決して怒らずいつも笑みを浮かべているのです。お地藏さんの真言は、「ハハハ」という笑い声なので、その化身である閻魔様も笑っています。閻魔様の存在感に圧倒されます。

笑い閻魔御朱印は、とてもインパクトがあり、閻魔様も笑っています。



風と共に 《理》（22） 大輪啓展

毎月違ったテーマにて書かせて頂きます。
今月のテーマは、「続・育」

桜の蕾が今にも咲きそうな季節です。

それこそ若い時分には、花木や自然など見向きもしなかったのが嘘の様に、季節毎に魅せる自然の素晴らしさによりやく気が付ける様に成長できました。

今回は、前回に引き続きまして、育という言葉について。

少ない人数でその他大勢を効率良く動かす事が、会社にとつての損失を減らし利益向上に繋がるのです。

ここが必要となるのが、報酬でしょう。

その他大勢の大半が求め、誰にでも必要となる事だからです。

かと言って、多すぎても少な過ぎてもいけません。

この匙加減を絶妙に行つてこそが経営の醍醐味の一つであるとも言えます。

そして、2:6:2の法則。面白い物です。

優秀で意欲の高い2割、普通に働く6割、怠ける2割。

優秀な2割について、より良く育て過ぎてしまう

と、残り8割との温度差によって、いずれは退職し他の仕事に動いて行くでしょう。

怠ける2割を仮に排除したとすると、6割の普通の働く人の内2割が怠けていくのです。

だとするのならば、やはりこの様な状況に合わせ、規程や人事制度が必要となります。

一緒懸命に働く、動く、考える、

この様な人が損をしたり、陥れられたりする様な会社では、夢も希望ありません。

これは、会社のみならず世間一般的にも同じ事が言えます。

少し話は変わりますが、

他の人と一緒だと、大半の人は安心するんです。

構図は同じです。

8割の、普通に働く人と怠ける者は、周りを見て、「ちゃんとやってないのは自分だけじゃない」と安心するんです。

2割の働き者は、周りを見て、

「自分よりも頑張ってる人がいるから、自分もまけない様にしっかりやろう」と、自分を奮い立たせるんです。

真逆ですよ。

それでも、周りの人を見てどう思っても、自分自

身ははつきりとその姿を見て覚えてるんです。そこで、それを認識する事ができたら、そこらなんですよ。

今までの様に、自分には出来ない、頑張ったって上手く出来るか分からない。言い訳を続けて自分自身から目を逸らすのか、或いは、思い立って先に進むのか。

今回のテーマは、育。

どんなに他の誰かが、自分をら変えようと必死に努力してくれたとしても、結果、自分自身が気付き変わろうとしなければ、絵に描いた餅なんです。

きっかけはそれぞれです。

どうするかも自分次第です。

でも、必ず自分は見てるんです

逃げ癖をつけて、下を向いて進むのか、

怖くても変化を恐れず、前を向いて進むのか、

本当に望む姿とは何ですか？

今の世の中に不安は沢山あります。

でも、文句を言って、燻っていても仕方が無いじゃないですか、

希望が見出せなければ、自分で切り拓いて行くしかないのです。

明日、1年後、10年後の自分は想像出来ますか？想像出来る自分になりましょう。

それでは、また来月に。

新たな挑戦 14

菊地孝夫

〈郷の本棚 やさと図書館〉

4月1日に、この会のメンバーである伊東弓子さんに誘われて、このたびリニューアルされた、やさと図書館に行きました。伊東さんの主催される、「御留川」に関わる方々と一緒でした。旧八郷町庁舎にあった図書室には数回訪れた記憶があります。

高浜にあるコンビニエンスストア・ファミリーマートで13時に待ち合わせて、三台の車に分乗して図書館に向かいました。面識のある方が複数おられたので、ずうずうしくも仲間に加わり同乗させていただきました。

新築の匂いのする、旧八郷町舎の二階のフロアでした。おくには、CD・DVD対応のスペースなどもあったようです。私は、併設されている、ギャラリー 農村資料室をはじめに見物しました。

昔の、農機具やら生活用品など様々なものが展示してありました。その中には、私自身が実際に使ったことのあるようなものもありました。

こんなものまでもが、古い時代のものとして展示されるようになったのか、と思い、自身が年をとったものだ、と改めて思い知った次第です。

そのあとに、面白そうな本を手にして、パラ派エ多捲ったりしていました。

一緒に行ったみなさんはそれぞれ、あちこちのコーナーに分かれて、時間を過ごしていました。

やがて、伊東さんから声がかかって、

「そろそろ時間なので、おちやにしましょう。」ということに。

ベには、脇の軽食屋さんで軽く食べて、お茶をする予定でしたが、2時半までの営業でしたのでそうもいかず、がっかりして近くの「ブレッド」という喫茶店でお茶をすることに變更となりました。ここはわたしも以前に何度か来た店でした。ここはストリートモカは美味しかったです。

再び車に分乗して、集合場所に戻り、其処で解散しました。

残った五人ほどで、最近出来たばかりの、近くの古書店に行きました。

割烹旅館「いずみ荘」に隣接する、「縄文みずいろ文庫」という処です。店主さんが快く対応してくださって、なかに、おもしろい本があったので、思わず購入してしまいました。

其処では改めて、抹茶を頂きました。その隣からわざわざ運んでくださったものです。

ちゃんとした茶を喫することなど、全く機会もなくて、久しぶりでしたから、美味しくいただきました。

おかげさまで、美味しい飲み物にも出会えて、新たな知識を得ることもできて、有意義な半日ともなりました。

おまけに来館記念として、トートバッグまでいただくというおまけつきでもありました。

中々粹なことをするなと感じた次第です。

同行した皆さん方には、すっかりお世話になってしまいました。

この紙面を借りまして、お礼申し上げます。



エイプリルフールの日に、嘘のような幸運に出会えたことになりました。

このところ引きごもり気味だったためもあって、いい気分転換ともなりました。

〈思いついたこと〉

ここしばらく、ぼんやりと考えていたことに対する回答が、いきなり、「ぼっ」と頭のなかに閃いたものがあります。

この原稿を書いている間にも、その構想はどんどんと広がっていきます。

このところの新型コロナ・ウイルスの広がりによ
り、経済活動が圧迫されて、食品をはじめとする
生活必需品が次々と値上がりしています。

其処へもつてきて、ここに勃発した、遠くウクラ
イナでの軍事衝突が加わり、これから秋にかけて、
物価の高騰が、連鎖的に始まるのは、間違いない
所でしょう。

なおも悪い要素として、北米、カナダ・アメリカ
の小麦が不作です。それに関連してかどうか、「マ
クドナルド」のポテトが品薄だとか。食料の大半
を輸入に頼る我が国としては、もろに影響を受け
てしまします。

また、オペック「石油輸出機構」も原油の増産に
は消極的だし。それによって、ガソリン価格も急
騰しています。

資産もなく、僅かばかりの収入に頼る身としては、
必然的に自衛せざるを得ません。

そこで考え付いた方法がありました。
詳細を記そうと思いましたが、残念なことに、こ
こで紙数が尽きました。続きはまた次回というこ
とで。



城県の難読地名とその由来 (22)

木村進

馬や牛の付く地名

馬渡 【まわたり】 ひたちなか市 (旧勝田市)

馬渡 【うまわたり】 茨城町

馬渡 【まわたり】 稲敷市 (旧桜川村)

戊渡 【いぬわたり】 稲敷市 (旧新利根町)

牛渡 【うしわた】 かすみがうら市 (旧出島村)

牛込 【うしごめ】 美浦村

押戸 【おしど】 利根町

あちこち歩き回っていて、どうも同じような傾向
にある場所につけられたと思われる地名を集めて
みました。

茨城県には現在の住所録に 3 箇所の「馬渡」があ
りました。そして、読み方が 3 箇所少しずつ違う。
旧小字を含めるときつともっとたくさん出てくる
と思われます。

★ひたちなか市 (勝田市) 馬渡【まわたり】

角川日本地名大辞典には、本郷川上流に位置し、

地名は源義家が奥州遠征の途中馬を引き連れて川
を渡ったことによるという伝承がある (勝田市史)。
また国史跡の馬渡埴輪製作遺跡がある。

★茨城町 馬渡【うまわたり】

角川日本地名大辞典には、涸沼川下流右岸に位
置する。縄文時代の馬渡遺跡がある。常陸国茨城
郡のうち、「まわたり」ともいう。と書かれている。

この馬渡地区の隣には「駒渡 (こまわたり)」とい
う地名がある。この駒Ⅱ馬であろうから、同じ意
味合いでつけられたものだろう。

★稲敷市 (旧桜川村) 馬渡【まわたり】

角川日本地名大辞典には、南北朝期に見える地
名。常陸国東条荘のうち、「馬渡津」「むまわたり
の津」の記載が見える。とある。

この稲敷市の馬渡は浮島の霞ヶ浦に面した入り江
となっていて、ところにある。霞ヶ浦がまだ内海で
香取の海とか〇〇の流れ海などといわれていた時
代、浮島は名前の通り陸と離れた島であった。ま
た潮の満ち引きで、時間によっては陸続きになつ
たりまた島となったりしていた時代もあるという。
利根川を渡った先の香取市にある「側高 (そばた
か) 神社」には、ある伝承が残されている。そ
れは、常陸国から馬をつかまえて香取側に連れて
くるときに、常陸国の追手が迫ってきた。この
時に側高の神がこの馬を浮島から陸続きの時に渡
らせ、すぐに海面を上昇させて浮島を島にして追
っ手が渡れなくしたという。この話の常陸国の馬
はどこにいた馬なのか? 常陸国風土記には「麻
生」の馬が常陸国の馬だと書いてある。というこ
とは、この話も麻生の方から霞ヶ浦 (香取の海)
を船で馬をのせて、この馬渡津 (つ) Ⅱ湊に運ん
だのかもしれない。

この地の「馬渡」は「まわたり」であり、馬の渡し場（湊Ⅱ津）ということの良いのだと思う。一般には、源義家伝説などが各地でいろいろな地名由来に語られているが、この地名伝説もほとんどが後から地名にこじつけられたものが多い。「馬渡Ⅱまわたり」についても一般的な解釈は「馬でしか渡れない湿地帯などにつけられた地名」との解釈がされている。

ただ茨城県の「馬渡」地名やその地形を見てみると、川や海（湖）を馬が渡れるような津（湊）のような役割（渡し場）をした地点につけられた名前なのかもしれない。川などでも、この地点で馬が渡れるとか、馬をのせる舟があるとかの地点ではないかという気がする。

一方、全国の人名事典を見ると、この「馬渡」の名前の読みは「まわたり、まわた、まわたり、もうたい、もうたり、うまわたり、うまと、うまなべ、うまわた、うまわたなり、ばわたり、ばと」などと実に多彩である。

またこの人名も全国にまたがってはいるが、九州が圧倒的に多いという。

「全国の馬渡、牛渡、鹿渡などの地名」

- ・山形県鶴岡市羽黒町馬渡ノ内下（まわりのうちしも）
- ・山形県鶴岡市馬渡（まわたり）
- ・茨城県ひたちなか市馬渡（まわたり）
- ・茨城県稲敷市上、下馬渡（まわたり）
- ・千葉県佐倉市馬渡（まわたり）
- ・石川県輪島市門前町馬渡（まわたり）
- ・石川県珠洲市宝立町馬渡（まわたり）
- ・滋賀県長浜市湖北町馬渡（もうたり）

- ・兵庫県三田市馬渡（まわたり）
 - ・兵庫県加西市馬渡谷町（もうたにちよう）
 - ・島根県松江市八束町馬渡（うまわたり）
 - ・福岡県大牟田市馬渡町（まわたりまち）
 - ・佐賀県唐津市鎮西町馬渡島（まだらしま）
 - ・長崎県諫早市馬渡町（まわたりまち）
 - ・熊本県熊本市南区馬渡（まわたり）
 - ・福島県双葉郡浪江町牛渡（うしわた）
 - ・茨城県かすみがうら市牛渡（うしわた）
 - ・青森県上北郡おいらせ町牛込平（うしごめたい）
 - ・茨城県稲敷郡美浦村牛込（うしごめ）
 - ・千葉県木更津市牛込（うしごめ）
 - ・千葉県長生郡白子町牛込（うしごめ）
 - ・福島県南会津郡南会津町押戸（おしど）
 - ・茨城県北相馬郡利根町押戸（おしど）
 - ・秋田県山本郡三種町鹿渡（かど）
 - ・千葉県四街道市鹿渡（しかわたし）
 - ・宮城県栗原市一迫鹿込（ししごめ）
- 「馬渡」地名の中で、人名の馬渡発祥の地と書かれているのが、佐賀県唐津市鎮西町馬渡島（まだらしま）だ。馬渡島は佐賀県唐津の先の玄界灘に浮かぶ比較的大きな島で隠れキリシタンがすんでいた島として知られている。しかし、一方ではこの島は大陸や朝鮮半島への航路に重要な島であり、その名前から「日本で最初に馬が来た島」ともいわれている。一方で、この島の名前は清和源氏一族（源満仲の後裔）の「源義俊」が流されてつけられたという説がある。平安時代の末期に美濃国馬渡（もうたい）庄城主の源義俊が左遷され、この地に土着し、自らを馬渡氏と名乗り、島の名前も「馬渡島」としたという。かなり昔から日本各地には「馬渡」という地名があり、いろいろな

読みが行われ、その地から興った武将が「馬渡」を名乗り、その人が移って土着した土地も「馬渡」という名前になった。というようなことが考えられる。

★かすみがうら市（旧出島村） 牛渡【うしわた】
★美浦村 牛込【うしごめ】

この2つの地名は関連があると見られています。大昔の官道は、榎浦の津（現在の江戸崎付近？）が、下総国（現千葉県）から常陸国（現茨城県）への入口でした。

この稲敷市の榎浦の津（えのうらのつ）に上陸した官吏たちは都から牛車に乗ってやってくるのですが、まだ土浦方面は湿地帯で陸続きで行くのが困難なため、霞ヶ浦を舟で渡ったようです。

このときついて来た牛が舟に載せられたか、または陸に留め置かれたかは定かではないが、陸を離れていく官吏の舟を追いかけて、または途中で海に飛び込んで、流れ着いた先が、かすみがうら市の「牛渡（うしわた）」で、牛を押し出した場所が美浦村の「牛込」だといわれています。牛渡にはこの牛が死んで流れ着き、これを埋葬したという「牛渡牛塚古墳」があります。これも伝承話ですが、興味深い話だと思います。

★利根町 押戸【おしど】

現在この利根町と隣の龍ヶ崎市は陸続きですが、大昔は間に大きな川がありました。

また古代には主要街道はこの利根町を経由して舟で対岸に渡っていたようです。「押戸」地名はこのように舟を押し出す地につけられた地名だと考えられています。

【風の談話室】 《読者投稿》

後世に遺す

京都府木津川市 今井 直

《百舌鳥・古市古墳群》（堺市・羽曳野市・藤井寺市）が、遂に世界文化遺産に登録された。近畿で唯一、世界遺産がなかった大阪府は、10年余りこの日を待ちわびた。全長200メートルを超える世界最大級の前方後円墳7基を含め、5世紀頃に築造された全49基の古墳群である。古墳時代、この地域は我が国の中心であり、文明が発達していた大陸への航路の起点だった。世界遺産といえど国の内外から観光客が押し寄せ、大きな経済効果がもたらされる。大阪は商人の街で、遺産登録を機に経済波及効果は400億円以上と目論んだそうだ。百舌鳥・古市古墳群が「後世に残すべき普遍的価値を持つ物件」であるのは確かだが、「観光資源として価値のある物件」かどうかは別問題である。

古墳群の代表格である仁徳陵古墳（全長486メートル、クフ王のピラミッド（底辺約230メートル）や秦の始皇帝陵（全長約350メートル）と並ぶ世界三大墳墓のひとつである。しかし、陵墓は宮内庁が管轄する皇室遺産だから立入りができない。出来るだけ近づいても、水が淀む周濠の向こうに樹木が生い茂る墳丘とは、余りにも地味な風景だ。ピラミッドや兵馬俑のようなインパクトがない。姫路城や厳島神

社を目の当たりにした観光客の満足感とは比べ物にならないのである。遺跡を訪れる人たちにどのように体験してもらうかが大きな課題だ。

仁徳陵は、外濠に沿って周遊路があり散策できるが、一周すると約2.8キロもあり、ジョギングを楽しむ人はともかく一般的とは言えない。飛行機の窓から見える仁徳陵は素晴らしく、上空から眺めるに限る。だが風致地区内にあり、建物の高さは15メートルまでと規制が厳しく、展望タワーの建設や遊覧飛行の定期便も難しいと聞く。既設の堺市博物館に隣接してオープンしたビクターセンターでは、8K空撮映像で古墳群の雄大さを体感できるシアターを用意した。これとてユーチューブに馴れた人々を、どれほど満足させることができるだろうか？また別のガイダンス施設では、バーチャルリアリティー（仮想現実）技術を使った疑似体験ツアーも行われている。ドローンで上空300メートルから撮影した古墳群の映像を、ゴーグル型のディスプレイで見ることができるとのようだ。

肉眼で眺望するなら、堺市役所（南海・堺駅駅前）が21階展望ロビーを無料開放している。80メートルの高所からは、眼下に千利休や与謝野晶子ゆかりの街が、また日本一高いビル「あべのハルカス」（大阪市阿倍野区）もくっきりと見える。年中無休で夜9時まで利用できるから美しい夜景は存分に楽しめる。肝心の仁徳陵は……残念ながらこんもり茂った森にしか見えない。家屋が立て込んで周

濠

すら隠れている。観光客は皆、教科書で見た「鍵穴」を期待しており、フラストレーションが高まるばかりだ。全景を見るには「あべのハルカス」展望台と同じ300メートルの高度が必要だという。しかしハルカスは仁徳陵から10キロも離れているため、やはり森にしか見えないという。さて、どうする□果たして解決の鍵は見つかるだろうか？

《「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群》（福岡県宗像市）の場合、観光目的を一切排除する姿勢を鮮明にした。宗教上の理由で女人禁制であったが、世界遺産登録を機に、神職以外の入島を全面禁止するという形でさらに厳格化した。玄界灘に浮かぶ「神宿る島」には渡れないが、「海の道むなかつ館」などガイダンス施設では、展示内容は充実している。

私は一昨年初秋、ブナの原生林を見に《白山山地》を訪れた。青森・秋田両県にまたがる広大な地域だから、初心者コースで半日の滞在だったが大満足であった。平日にもかかわらず大勢の入山者が、世俗を忘れて大自然とのふれあいを堪能していた。世界遺産に登録されると、維持費が更にかかるのは分かるが、所によっては入場料・拝観料が急に2〜3倍に値上げされたのもしばしばだった。大阪は経済効果を過度に期待したのが間違いのかもしれない。「富岡製糸場」（群馬県富岡市）や「石見銀山」（島根県大田市）のように、一時的なブ

ームで終わってしまうのだろうか？

世界遺産や国宝について、勘違いや誤解しがある点が幾つかある。以前、高知城へ行った時、追手門の前に「國寶 高知城」と書かれた大きな石碑が印象に残っていたので、国宝だとばかり思っていたが実際は旧国宝だった。(注)「國寶高知城」碑は現在もそのまま。昭和25年に「文化財保護法」が施行されると、戦前に指定されていた旧国宝は一旦、重要文化財とされ、一部の優れた文化財は後に新国宝に再指定されたという経緯がある。現在、国宝に指定されているお城は、姫路城、彦根城、犬山城、松本城、そして2015年に松江城が選定されて5城となった。(二条城も国宝だが、城郭としてではなく「二の丸御殿」が住宅として指定されている。)

コロナ禍でも「正倉院展」は相変わらずの人気だった。正倉院宝物は1200年以上もの間、幾多の危機に遭遇しながらも、極めて良好な状態を保っているのは奇跡に近い。およそ9000点に及ぶ宝物だが、意外にも国宝に指定されているものは1点もない。宮内庁の厳重な管理下にあることから、文化財保護法による国宝指定の対象外という。

元々は東大寺の倉庫だった正倉院だが、明治の世になって宝物の重要性から宮内省の所管となった。宝物は永く校倉造りの「正倉」に收藏されてきたが、1952年から鉄筋コンクリート製の新し

い宝庫に移されている。しかし、世界遺産に登録

するにあたり、《当該文化財はその国の法律により保護されていること》が条件であることから、正倉院正倉は1997年に、文化財保護法による国宝に指定され、翌年、ユネスコの文化遺産に登録された。不動産である宝庫の建物だけが国宝であり、動産である美術工芸品は指定されていない。

《琉球王国グスクおよび関連遺産群》の首里城(那覇市)は、琉球王国の栄華を今日に伝えるシンボルである。先ごろ火災が発生し正殿などが全焼したが、遺産登録は取り消されていない。世界遺産としての普遍的価値は、近年に復元された建築物ではなく、首里城跡にあるという。つまり焼失した首里城の下で遺構なのだ。焼失前に見学して「沖縄の世界遺産は実に素晴らしかった！」と言う人たちは、真の遺産をほとんど見て来なかったことになる。首里城は過去に何度も焼失し、その度に再建されてきた。そして太平洋戦争末期の沖縄戦において焼失した首里城(18世紀初めの築造)は、かつて国宝に指定されていた。

平城宮跡についても同じようなことが言える。国の特別史跡・特別名勝であり、ユネスコの厳しい登録基準をクリアした《古都奈良の文化財》のひとつだ。だが、復元された大極殿や朱雀門は国宝に指定されていない。たいていの観光客は見映えするこれら建築物に感嘆の声を上げるが、国宝《平城宮跡出土木簡3184点》を目にする人は少

ない。

また最悪なことに、宮跡を南北に分断するかのように、近鉄奈良線が大極殿と朱雀門の間を通り抜けている。世界遺産の登録区域内を電車が走るのは平城宮跡だけである。(注)鉄道そのものが登録物件である場合を除く)ところが、このほど宮跡の外に線路を移設することが正式に決まった。

「景観の改善」だけでは、行政はなかなか重い腰を上げない。周辺の交通渋滞が深刻化したのである。最寄りの大和西大寺駅は東西の奈良線、南北の京都線・橿原線が交わるターミナルで、観光特急「しまかぜ」を含む全ての列車が停車する。阪神電車や京都市営地下鉄も乗り入れており、バラエティー豊かな車両が次々と同駅で複雑に平面交差するため、鉄道ファンからすると実に楽しい場所である。駅の橋上コンコースにある展望デッキは鉄ちゃんの人気スポットだ。しかし、1時間のうち最大90分間も遮断される「開かずの踏切」でイライラする人も多い。それで駅を高架に、奈良方面へは大きく迂回して宮跡外で地下に移設するという計画だ。総事業費は約2千億円！何はともあれ後世に伝える遺産から、目障りな部分が取り除かれることになった。大規模工事に向け用地買収や、遺跡発掘調査などクリアすべき難問は多く、令和四十二年度(2060)の完成を目指すという。遠い先の話である。

おすすめの本 14

燕石

おすすめの本の紹介は、ひとまずちよっとお休みして、今一番関心のあることについて、お話ししましょう。

この先は、かなりデリケートな部分もありますから、心してお読みください。

〈ザッピング〉

TVをつけると、先月の24日からウクライナの事ばかりが放映されています。

普段はもっぱら、お笑いや芸能・歌い手の事などばかりやっている、おふざけ放送番組もまたしかりです。

連日、早朝から深夜まで、暇に任せてザッピング（チャンネルを変えてあちこちと放送をつまみ食いすること）をしていました。

手元のスマートホンも、つけっぱなしにして幾つかのサイトをチェックしていました。

おかげでこのところ、すっかり寝不足になってしまいました。

現地からのリポートが次々とたらされますが、この会報が出来上がる4月初めごろには、更に状況は変わっていることでしょう。

ですから、今言えることは、あくまで私の個人的な見解に過ぎず、将来の見通しについても、かなり正確さには欠けると思います。

〈ウクライナ〉

誰しも、このような不幸な状況が一日も早く解決することを望んでいると思います。

肝心な事は、ウクライナの市民の安全と同時に、その陰に隠れてしまつて余り伝えられてはいない、碌な予備知識も与えられずに最前線に放り込まれた「若いロシア兵」の安否の事です。

彼らの多くは、たとえ生還しても長くいわゆる戦場トラウマによる後遺症に、悩まされることでしょう。

どうしても、この国で過去に起きた戦争の記憶が脳裏をよぎります。連日流される映像には、胸塞がれる思いです。

この紛争の終息を巡つては、早くも幾つかの国が仲介者として挙げられていますが、その一つに中国が挙げられています。

習近平政権は、いまのところ、プーチン大統領と差して話ができる唯一の大国の首脳と言えるでしょう。

中国としては、ここでロシアが敗北すれば、次の矛先が自国に向けられるのは見えていますから、そのような事態がおこることは避けたいところでしょう。

現状では、プーチン大統領は、アメリカや、EUの首脳とは直接交渉には臨まないと思います。

停戦交渉に応じるとすれば、

1 ロシア軍が軍事的に大敗北して、撤退を余儀

なくされるか

2 国内の経済が行き詰ってしまうか、

3 あるいは極めて低い確率ですが、クーデターによつてプーチン政権が崩壊するか、
でしょうかね。

お互いに、メディアを駆使して互いの正当性をアピールしあっています。さらには、ネット空間を利用しての激しい情報戦を繰り広げています。

果たして、いつ終息を迎えるのかは、誰も予想がつかないところでしょう。

また、互いに夥しいフェイクニュースを流していることによつて、さらに事態を複雑化・深刻化させてもいます。

今言えることと言えば、この事態がどのような結末を迎えるにしても、世界の軍事・経済バランスを大きく変えてしまうのは間違いない、ということでしょう。

簡単に言つてしまえば、国境線が引き直されるということにつきます。

もちろん、日本も例外ではありません。

今、こころしておかなければならないのは、この機会に乗じて、フェイク情報を煽つて、実はまったく無関係の、世論操作が行われつつあることです。

溢れ過ぎた情報の中から、いかに正確な情報を見つけることができるか、これはなかなか難しいことです。

一つの判断基準として、いかにも勇ましい論調には、眉に唾をつけてかかることです。日ごろふざけ散らしていた人々が、一転して如何にも知ったような顔をしてしやしやり出てきて語るの、ほとんどがこれに当たります。

極論を往つてしまえば、これまで様々な言い分を垂れ流していた人たちが、世のなかの空気が変わりましたと、これはまずいなどばかりに、とたんに過去に自分が言ってきたこととは全く正反対の事を言いだして、過去の自分の行いには頬を紅くしたり、全く忘れたふりをするのです。

新型コロナウイルスのことにしても、地球温暖化にしても、或いは原発にしても、今まで原因を造つたり、或いは推進していた人物が、一転して反対の立場に立つてみたり、過去の認識の誤りを、素直に認めてを反省しないばかりか、おおかたは、その場で自分の都合のいい方に加担しては、利益を得ようという面々ばかりです。

そのような「恥知らずの変節漢」なら、いくらでも名前を上げることが可能ですが、時間の無駄です。書いてあるだけで不快になるので、あとは読者諸氏の判断にお任せします。

勿論、彼ら・彼女らは必死になってひた隠すでしょう。実を言うと、それらをあばくのは、下手な推理小説よりもずっと面白いのですよ。

こんなに居たのか、と思うほどに沢山の人が、このときとばかりに、メディアに登場して発言していますが、そのうちの数人ぐらいしか、わたしは

信用はできません。

もしも、本当に専門知識を持っていて、問題意識があるのなら、物事があらわになり、世間の注目を浴びる以前に、きちんと意見を言っておくべきであると思います。

ウクライナで言えば、以前クリミア半島にロシア軍が軍事侵攻した時にこそ、大声を上げるべきだし、今この時も、東南アジアのミャンマーで進行しつつある、ロヒンギャ人に対する軍政権の弾圧を非難し、即刻経済制裁をすべきです。

あの時は、経済制裁をすれば、ほかのミャンマー国民に対して打撃を与えらるゝとして、制裁行動をとらないことに対して、しきりに言い訳をしていたではありませんか。

ウクライナの避難民の人道的な受け入れを、と簡単に言いますが、この国の「難民受け入れ態勢」は、あらゆる面で脆弱で不十分です。

そもそも、これまで難民認定を受けた人々をほとんど受け入れてきませんでした。言つて見れば、長年にわたつて難民に対する「鎖国政策」をとってきたという訳です。

国の管轄機関である「名古屋入国管理局」における入所者に対する、非人道的扱いの一つとつてみてもその後進性がわかるというものです。

国はその誤りを決して認めようとはせず、法廷に持ち込んで、証拠の一つとなる録画したビデオも、そのほとんどが公開されてはいません。

もしも入管職員が、適正な扱いをしていた、と強弁するのなら直ちに全てを公にすべきです。

論点を戻しましょう。

先日、の大雪によつて、「東京電力管内」の電力需要のひつ迫がしきりに言われ、節電の呼びかけがなされました。

このままピークを迎えたならば「計画停電」が行われ、かつてのように停電になります、としきりに脅し文句を並べ立てていました。

(さすがに今回ばかりは、ライトアップの停止も盛り込まれましたがね。)

一方では、「選抜高校野球」の中継や「大相撲」の中継やらを全く能天気な垂れ流してしまいましたね。

もしも本気で「計画停電」を言うのなら、即刻、不要・不急な放送は中止して、後日録画で流せば済むだけのなしです。

スポーツファンの皆さんには、いささか申し訳ないですけれどもね。

かつては、キエフやポツダムやオデッサや古くは「ロシア革命」に登場したり「独ソ戦」の主戦場になったりしたところでした。穀倉地帯であり、原油の輸送ルートでもあったからです。

ロシア・ウクライナ両国は、互いを、ヒトラー・ナチスになぞらえて、非難の応酬を繰り返しています。

「あの時に言っておけば良かった」と、後悔するよりも、今言っておくべきと考えて、あえて拙文を書いて火中の栗を拾うことをした次第です。

やささと暮らし (61)

さと女

三寒四温・・・暖かい日が続く、今にも桜の開花と思ったら、突然の寒波がやってきた、おまけに大雪。凍り付いた田圃際の道が怖いので、竹の師匠の処は急遽休みに・・・？

・前夜から強風が吹き荒れた、寒く寒い一日・・・
「いちごや」さんから、突然のヘルプコール。夫婦二人で、イチゴ苗の手入れをしているが中々すすまないところ。こんな話を聞きつけた何時もの仲間たち、早速みんな集合。ハウス内でイチゴ苗の枯れ葉や不要のランナーを取り除く作業。総勢5人で2棟のハウスを4時間程で片付けた。甘い香りに包まれ、つまみ食いしながらのお手伝い・・・ご夫婦にも喜ばれこちらも嬉しくなった。美味しいイチゴがお客様の元に提供されるまでには様々な事が・・・。先日から、ハウスに置いてある受粉用ミツバチの巣に、ミツバチが一匹も居なくなつた。受粉が上手くいかないと形の悪いイチゴになつてしまふらしい。ミツバチはもう戻らないので早く手配しないとあと、ボヤイテいた。

・此の日は、カラオケルームの引越と、レコードコレクションの整理に・・・。集めに集めたレコードは、幾つもの棚に一杯(数百枚?)クラシックが好きだと言つて、ギターも楽しんでるようだ。此の日の手伝いはほんの一部・・・まだまだ果てしなく続きそう?後はぼつぼつやるよ、と言うことで夕飯をご馳走に。

・「いちごや」さんご夫婦、二人ともに人が大

好き、これからは生き方改革だと80歳を超えて益々盛ん。そして、奥さまは料理が大好き、みんなに食べて貰うのが大好き。頂くご馳走の数々、出来合いの物は好まず、その手際よさにいつも感心してる。

・辻いちご団地周辺の山々もだいぶ春めいて来た。間もなくピンク色に染まる山々を想像するのが楽しい。此の日は「いちごや」さんに、可愛いお客様がバス6台でやって来る・・・子供たち、楽しくイチゴが採れるように、事前に整理・・・。コロナでのびのびになつていたイチゴ狩り、卒園のいい思い出になることでしょう。

・暖かさに誘われてフラワーパークに行つて来た。のんびりゆつくり河津桜目指して、5分咲き位かな、鮮やかなピンク色がとても綺麗。贅沢なひととき・・・。

・洋服ダンスの改造。ものがぎっしり詰まっていたダンス2棟、邪魔な扉を外し、外した扉を分割し棚にして貰う・・・只今整理中、使いやすくなるかな?

・バイモ(貝母)が咲いた・・・目立たなくひっそりと咲いている。その花言葉が凄く・・・謙虚な心、凜とした姿、威厳、才能、努力等、生薬としての役割もあるとか。浅黄色の瀟洒な花が清楚で美しい!



石岡地方のよもやま話

木村 進

(10) 頼朝が石岡に来て歴史が変わった?

よもやま話のタイトルとしては大げさだが、源頼朝が常陸国国府(石岡)にやってきたことが鎌倉時代の吾妻鏡に記されている。

来たのは1180年11月始め。

源頼朝が伊豆の蛭ヶ小島に流刑となつたのは1160年の3月、まだ14歳くらいの時だ。

そして1180年の4月に後白河法皇の皇子「以仁王」が平氏追討を命ずる令旨を諸国の源氏に発した。しばらく静観していた頼朝が兵を挙げたのが、同年8月であつた。

しかし石橋山の戦いに敗れ安房国(千葉県東部)へ船で逃れることになる。

この安房国で勢力を立て直そうと上総・下総で権力を持っていた「上総介広常」と「千葉常胤(つねたね)」に援護を要請します。

この両名の援護を受けて、下総国国府(市川市)に入り、坂東平氏を見方につけて10月6日に鎌倉に入ります。

都の平家から差し向けられた平維盛の軍を10月20日に打ち負かしました。

そして、そのまま京の都に攻め入るのではないかと考えたときに、この上総介広常と千葉常胤は後方の常陸国にまだ源氏に従わない武将がいるので、この憂いを絶つべきだと進言したのです。

この憂いとなつていたのが常陸国の北部を支配していた佐竹氏です。佐竹氏は現常陸太田に居を構え、奥七郡(多珂・久慈東・久慈西・佐都東・

佐都西・那珂東・那珂西）を支配していました。

1180年11月4日、源頼朝はこの進言を受け入れて、佐竹氏追討のため常陸国府（石岡）にやって来ました。

佐竹氏には頼朝への帰順勧告が届けられておりましたが、佐竹氏は当時、都の平家とは仲が良く態度が明確ではなかったのです。

当時、太田の城の城主は佐竹隆義（佐竹氏2代当主）でしたが、隆義は京にいて留守でした。そして常陸の城は2人の息子にまかせていたのです。常陸国府（石岡）にやってきた上総介広常はこの2人の息子（義政・秀義）に会見を申し入れました。

佐竹隆義の長男義政は上総介広常が縁筋にもあたるため、誘いをむげに断ることも出来ずに部下をつれて常陸国府に向かいました。

一方弟の佐竹秀義は危険を察知して、山城である「金砂城」に立て籠もりました。

さあ、常陸国府に向かった佐竹義政は国府の入り口である園部川に架かる「大矢橋」までやって来ました。一方これを出迎えに上総介広常もこの大矢橋に部下を引き連れてやってきました。

大矢橋をはさんで両軍勢は向かい合います。そして互いに1対1で橋の上で会うこととなり、上総介広常と佐竹義政は大矢橋の半ばに駒を進めました。そしてその出会いざまに広常は義政を切り殺してしまつたのです。

橋の向こう側で待機していた佐竹の部下たちはこれを見て、一斉に逃げ帰ってしまいました。

現在この大矢橋の麓に「佐竹義政の首塚」が残されており、看板が建っています。義政の胴も川の下流の行里川（なめりがわ）の付近まで流され、そこに胴塚が築かれたといわれています。

またこの大矢橋は道路のバイパス工事などで新しく移動し、常磐自動車道の「石岡・小美玉スマートインター」が目の前に出来ました。今はこのインターから茨城空港までの新しい道路も完成してすっかり様変わりしています。

園部川も大きな川ではなく、当時の大矢橋もそれほど大きな橋ではなかったと思われます。

歴史はここで大きく動いていきます。

金砂城に立て籠もった弟の佐竹秀義を頼朝・広常軍が攻め、秀義は更に山奥に敗走させ、関東には反対勢力はなくなったとして頼朝は京の平家を討伐に向かったのです。

この大矢橋事件が無ければ、鎌倉幕府は成立しなかったかもしれません。

でも何か腑に落ちない気もします。

それは「上総介広常」、「千葉常胤」「常陸大掾（だ いじょう）」ともにすんなりと源氏の「頼朝」の見方となっていますが、かれらは坂東平氏、常陸平氏といわれる桓武平氏の系列で、伊勢平氏といわれる平清盛などの平家とは同属なのです。一方の佐竹氏は源氏の系列です。

頼朝が八幡太郎源義家の直系なら、佐竹氏は甲斐の武田氏と同じ八幡太郎の弟の新羅三郎（しんら さぶろう）義光の直系です。

佐竹氏は義光の長男、甲斐武田氏は義光の次男が

興しています。

この事件の430年後に、この佐竹氏によって常陸大掾氏も滅ぼされることになるのですからおかしいものですね。



（佐竹義政の首塚）

上記写真の大矢橋は、石岡・小美玉スマートインターが完成する前ですが、すでに新しい道路が出来て架け替えられたものです。この写真の右下にその前にかかっていた小さな大矢橋がありました。これは現在取り外されています。



下士官の手記 3 燕石（えんせき）

（先月号からの続き）

大陸での日々 4 陸軍記念日

×月×日

今日は陸軍記念日である。日露戦争に勝利した日だ。

上級部隊からは、少しばかりの酒保品が届けられた。勤務は半日で終わりにして、午後からは食事会とした。たまには息抜きも必要だろう。少しばかりの菓子などで雑談にふけた。

「今日は無礼講だ、日ごろの疲れを休めるように。」

古参兵の一人が、このあたりの古酒の壺を抱えてきた。何処ぞで調達してきたものを隠していたのだろう。全く古参兵ときたら抜け目がない。

「飲んでもいいが、定時報告と当直はいつも以上に念入りにやれよ。」

「わかっております。」

酒が入ると、みんな活気づいてきた。

「××二等兵、死んでも命令を守りますっ。」

「わははは」

「こいつ、今日は珍しく気合が入ってるな。」

「あははは」

「貴様みたいなくそ真面目な奴が先に死んじまうんだ。」

「おいおい、なんだい、こいつ泣いてやがる。」

「ほっといてやれ。こいつはおととい戦友をなくしてるんだ。」

「さあ、今日は、楽しくやろう。」

「そうだ、ぐつとやれ。」

「××二等兵は、隊長殿のそばをはなれませんか！」

「自分もであります！」

「自分も・・・」

「自分は、隊長殿の為にいつでも死ねます！」

「自分もであります！」

と、口々に言う。

「・・・驚いたな。え、こいつら本気だぜ。」

と古参兵があきれ顔で言う。

「こいつら相手にしたら、俺達でもかなわんな・・・」

「さあ景気づけに歌でもやれよ。」

「それより、もっと色気のある話でもしたらどうだ。」

飲んだり食ったりしながら、一通り銘々故郷の自慢話や、家族のことなどを話していたが、そのうちに祭り自慢になった。

一人が故郷の「くらやみまつり」というのを話し出した。

新月の夜、男たちが下帯一つで仮面をかぶり、年ごろの娘のいる家に押し込むのだという。娘たちの方もわかってるので、大半は隠れてしまう。「貴様のところだつて、どうだかわかったもんじゃないぞ。」

「今頃、おつ母が男を咥えこんでるかもしれないぞ。」

「なんだと。」

聞いている男の顔色が変わってきた。

「その辺にしておけよ。」

「××の話など気にするな。」

「さて、そろそろこのあたりでお開きにするか。」

そろそろ潮時だろう。

「隊長の話も聞かせてくださいよ。」

「まあ、この次の楽しみにとっておこう。」

×月×日

滅多にない骨休めが終わると、再び過酷な勤務が待っている。周辺の戦闘が日ごとに激化してきて、下手に単独で部隊の宿営地を出たりすれば、あつという間に命を落としてしまう。

×月×日。

日本軍の小部隊の全滅などは、近頃ではちっとも珍しくもなくなってしまった。敵もかなりの大損害のはずだが、何せ人口が多い。いくらやってもやつてもきりが無い。

中国軍は、広い国土を利用して、巧みに作戦を立てた。遷延作戦というやつである。

どんどん奥地に深く誘い込まれ、追撃する日本軍の兵站線が尽きたところで、一斉に反撃に出てくる。こちらは、弾も食料も尽きているからやられ放題となる。

×月×日

後方へ送られてゆく負傷兵の数も日ごとに多くなっていた。

退却する道筋にも、あちらこちらにゲリラ部隊が潜んで待ち構えている。命からがらやつこのことで安全地帯に逃げ込む。こうして、死ななくてもいい多くの日本兵が殺された。

無能な指揮官は、馬鹿の一つ覚えで「突撃、突撃」というばかりである。前線に必要なのはこんな掛け声ではない。十分な食料、装備、弾薬なのだ。

掛け声だけで戦に勝てるなら、こんな容易いこととは無い。

表ざたにはなっていないが、中隊・大隊規模での投降もあったようだ。表向きは、無敵の日本軍である。不敗を誇り、まして部隊単位での投降などはあり得ない話だった。

×月×日。

陸軍記念日の宴会以来、部隊内の結束がますます高まった。

いざとなれば頼りになるのは、まだ子供っぽさの残る新兵たちしかない。

×月×日。

食料の調達。新兵の訓練。陣中日誌の作成。無線連絡。等々、分隊長として、やらなければならないことが山ほどある。

×月×日。

厳しい寒さに耐えるため、防寒着も必要になる。こればかりは周辺から調達することもできない。日露戦争の時、寒さにも散々苦しめられたはずだが、そんな教訓は一向に役立っていない。

被服廠というのがあって、ここが衣服を管轄している。廠長は、退役間近の少佐殿だ。聞いてみると無類の女好きらしい。山の女たちに使いを出し、金はこちらが払うから、もてなしてくれと連絡する。

×月×日。

当番兵とともに被服廠に往き、責任者と会う。うまく連れ出して、山の女のところへ送り込む。

×月×日。

はなぐすりがきいて、防寒着がごっそり届く。私用には黒テンのコートが届けられた。

×月×日。

以来この被服廠には出入り自由になった。

話好きのこの老少差は、日露戦の時の裏話などを聞かせてくれる。有名な指揮官の誰それは、無類の女好きで、当時少尉だったこの少佐がせっせと手配したのだという。夫人が恐ろしい焼き餅やきで、国を離れたのいいことに、夜ごと相手を

取り換えていたという。

「そのせいで、始めはロシア軍とともに戦えなかったんだ。」

という。確かに指揮官がこれでは、部下たちの士気も上がるまい。

大陸での日々 5 陸軍病院

×月×日。

朝から高熱が出て意識不明となる。

このあたりの疫病に感染したようだ。連日の激務の疲れもあったのだろう。気が付いてみると内地の陸軍病院の白いベッドの上だった。

面会謝絶。絶対安静。個室に隔離された。

幾日も意識がなかったらしい。

×月×日。

来る日も来る日も注射と採血。一時は危なかったようだが、手当が速かった為に助かったらしい。隔離病棟は、一般の病棟から少し離れている。大部屋なのだが、同室の者はいない。ひよっとすると結核の恐れもあるという事で、一人にされたということだ。起き上がろうとしても手足に力が入らない。まるで赤子のように、看護婦の手のままに、すっかり丸裸にされ、体を拭き清められる。

×月×日。

もう幾日ここにいるのだろうか。毎日の食事は水のように薄い味のないスープだけである。

看護婦の一人を拝み倒して何とか紙と鉛筆を手に入れた。これまでの経験を書いておこうと思ったからだ。もしも看護婦長に見つかったら、二人とも大目玉である。軍の病棟を預かる看護婦長ともなれば、れっきとした下士官待遇である。階級

で行けば上官にあたるわけだ。一、二度病室に現れ、にこりともしないで病棟の看護婦にききと指示を与える。

×月×日。

毎日、下半身をすっかり露わにされ、若い看護婦の前で、タオルで拭かれる。これがどうにも恥ずかしくて、堪らなく苦痛なのである。

「そこは自分でやりますから。」

というと、

「聞き分けのないことを言うな。」

と一喝された。男の衛生兵はほとんどいない。みんな前線に送られた模様だ。看護婦たちはずまして体中を拭く。行軍中に、足の指が疥癬にかかり、痒くてたまらない。

×月×日。

交代の看護婦の話では、自分付きの看護婦になりたいというものが大勢いたという事だ。こう話してくれた看護婦も、国に許嫁がいるのでしかたなく諦めたという。

×月×日。

制服を脱いでしまえば、皆素直な性格だ。普段は年頃の若い娘だ。ことあるごとに、菓子等を与えたから、時に冗談も言い、嗤い合えるようになった。

「看護婦さん、足が痒くてたまらない。何とかしてください」

「帝国軍人が、泣き言を言っではいけません。こんなもので死にはしませんよ。」

と笑われる始末。

×月×日

いくらか固形物が食べられるようになった。手足もいくらか力が入るようになって、少しの間な

ら上体を起こせるようになった。見習看護婦の一人が、新聞を持って入ってきて、

「ここに出ているのは貴方の事か？」という。

部隊名も名前も伏せてはあるが、間違いなく自分だ。大きな見出しには、「××隊の××小隊長の殊勲」とある。看護婦たちが口々に「凄い」という。

「蒋介石軍の暗号の一部を解読しただけだよ。」

この日以来、待遇が格段に良くなった。日ならずして、「陸軍軍曹に任ず。」の辞令が届いた。名誉の負傷ということなのだろう。戦時なので昇進が速い。除隊しても行くところもないし、きつい勤務にもすっかり慣れてしまった。

×月×日。

留守にした部隊が気になるので、院長に頼み込んで、一時、特別退院許可を貰う。

通常ならばあり得ないことだが、元上官が出世して、今や陸軍の通信部隊の親玉になっている。

近々少将になるとかいう噂もある。訓練を終えるとすぐにM少佐の当番兵となり、少佐の昇進に連れて出世してしまったというわけだ。そのM大佐に連絡をして圧力をかけて貰った。

×月×日。

1週間ほどの外泊許可を貰い、輸送艦に便乗して、大陸に渡った。この船は最近造られたばかりの、新鋭の高速輸送艦で、武装も小型駆逐艦なみである。時折試験の為にフルスピードで走る。うしろに大きな波が残る。丁度いいとばかり、無線室の手伝いをさせられた。新しい無線機は感度もよく、ついでに自分の部隊にも連絡をした。自分の代わりの士官は、士官学校上がりの若い士官で、通信のことはさっぱりで皆苦労させられていると

いう。

原隊に立ち寄って、分隊あての郵便物を受け取る。

事務所の准尉からは、

「おつ、中隊長殿のお出ました。」

からかわれる。

人事係の曹長は、

「いや、冗談抜きで、このままいくと、俺たちの上官になってしまうぞ。」

「ははは、そのときはお手柔らかに頼むぜ。」

親切に、士官の心得などを教えてくれる。

×月×日

久しぶりに、みんなと再会することができた。

持って行った手紙や小包に喜んでいる。近頃は郵便もめつたに届かないという。少しばかりの土産も渡す。

小隊長のK中尉は、あまり面白くないようすだ。病を押して部隊に戻ったというので、連隊長に

呼ばれ、

「貴公は、当聯隊の誇りである。」

と褒められた。

日清・日露戦生き残りの老連隊長は、年の所為か感極まって、ついには涙声になる始末だ。

×月×日

名残りを惜しむ戦友たちを後にして、再び内地へと帰る。帰りの船便は、都合で台湾経由だとか。

寄港地で、大量のバナナなどを買う。地方では食料品が少なくなってきたはいきゆうになっているという事だ。

俸給が随分と上がったので、病院暮らしでは使い切れない。

×月×日

病院に帰り着き、院長に申告を済ませ、病室に帰る。検温に来た看護婦たちに、しよってきたバナナを土産だと言って渡した。

「わあーっ」

という大きな歓声が上がリ、「何事か。」と隣の病室の看護婦たちも顔を出す。

日にちが経ってちょうど黄色くなった沢山のバナナを見て、みんなからは笑顔がこぼれる。他の土産もみんなに配った。この日をさかいにして、私への待遇は格段に良くなった。現金なもので、食い物の効き目なのだ。

×月×日

いまだにときおり熱発がある。無理して大陸に渡ったのがまずかったのかもしれない。赤痢か、疫痢か、マラリアか。何れとも判別がつかないらしい。どうやら結核ではないらしいと分かって、ならばしばらくここで養生するかという事で、退院は当分お預けとなった。

×月×日

バナナの件以来、私の病室はすっかり若い看護婦の「溜り場」になった。怖い婦長も、私が同格の下士官となった為、煙たいのか滅多に現れなくなった。それをいいことに、彼女たちは暇さえあれば、菓子等を持ち寄って空いているベッドに腰掛けて、あれこれ無駄話をしている。時にはけたたましい笑い声も響く。孤独な病室もいつべんに華やかになってしまった。

×月×日

この前乗艦した高速艦の通信長は、アメリカ帰りとかで、英語が話せた。

故郷にいるころ、上級学校に行きたかったが、貧しかったため、高等小学校で終わった。そして

町の商店で、住み込みで働いた。それでも、何とか勉強したくて、早稲田の速記録などを取り寄せて、英語などを独学した。近くに、英語の私塾を開いている老人がいて、暇があると尋ねて言って教わった。古い英語の辞書も手に入れた。夜、勉強をしながら、いつかこの言葉をマスターして外国人と会話する場面を夢想したりした。ずっと前に映画で見た、金髪美人と、語らう場面を想像したりした。

家が、貧しい小作農家で兄弟姉妹も多かったから、口減らしの為もあった、17歳の時、志願して、できたばかりの通信学校に入ったのだった。入学試験は難しかったが、何とか合格した。通信の講義のほかに、兵士としての訓練もあり、それこそ休む間もない日々だった。

この通信長が言うのには、
「これからは、中国だけでなく世界中の国を相手にする事になるだろうから、英語、仏語、独語、西班牙语、露語、とにかく、あらゆる国の言葉を勉強しろ。必ずいつか役立つ日が来る。」という。
後日この通信長は「大和」と運命を共にした。
×月×日。

看護婦が来て、地元の新聞社が取材したいといってきたという。なんでも、××での戦いの模様を連載していて、活躍した通信隊の事も記事にしたいのだということだ。通信隊司令部の許可も得ているんだそう。一応は軍事機密なので、べらべらと喋る訳にもいかない。もともと最近、報道班というのが出来て、検閲が厳しくなったので、迂闊な事は書けなくなってきた。断りきれず、取材を受けて、写真に納まった。

カメラマンも一緒に連れてきていた。カメラマ

ンの言うままに、庭に出て、看護婦達と並んで撮ったり、病室で椅子に掛けてカメラに収まったりした。

×月×日。

紙面はかなり大きく私の記事と写真が載った。白衣を着て、椅子に座って真ん中に写っている。看護婦の一人が新聞を持ってきてくれた。

記者たちが手土産に持ってきた見舞いの菓子類はすべて、病棟の看護婦に遣ってしまった。こうして、病院の中ですっかり有名人になってしまった。

×月×日。

食事がようやく、かたい飯に替わった。これまでは毎日毎日、味のない水のようなスープだけだった。それが終わると、味のしない御粥だ。正直なところ、こんなにもメシが美味いと思ったことはない。少しのおかずもついた。

×月×日。

看護婦に頼んで食べたい物を買ってきてもらった。

近頃では随分慣れてきて、少しの頼み事は聞いて貰えるようになった。近所のお兄さんと言ったところだろうか。

(この近所のお兄さんが、或る時をさかいにして後日全く別の人間にうまれ代わってしまうことになるのだが。)

(続く)



【特別企画】

打田昇三の太平記(20) 巻第九・1

徳川家光が設けた参勤交代の制度により諸大名のほか石岡市に隣接する志筑藩主・本堂氏のように一万石未満の旗本格でも「交代寄合」と言って江戸への往復をさせられていた中で、支藩(石岡など)を含む水戸藩は「藩主江戸詰め(在府)」に指定されていたので道中の面倒は省けたと思う。その理由として次のような事が推測できる。

幼少時代の家光はのんびりした坊やであつたらしく、父母の秀忠夫妻は利発な弟の忠長に期待するが、そうなると家光の將軍職が覚束なくなる。其れを心配した乳母・春日の局が密かに江戸城を抜け出し、浜松城に隠棲していた家康に直訴・嘆願し継嗣の座を明らかにして貰った。其の時に仲介をしたのが「英勝院・お勝の方」である。

此の女傑は太田道灌の子孫とも言われるが文武両道に優れ、常に家康の側近に侍して関ヶ原の合戦にも騎馬で従って居たという。十数名の側室中で只一人、浜松城(家康の隠居所)に同行を許されており、家康晩年の末子となる女兒を生んだ。

其の兒は将来、伊達政宗の嫡子と縁組をする約束であつたが夭折してしまった。嘆き悲しむお勝の方を慰める為に、家康は末子の頼房を英勝院の養子にしたのである。家康の死後に英勝院は水戸藩に身を寄せている。徳川御三家で尾張、紀伊の官位は「大納言」なのに水戸が「中納言」なのは其の為であろうと思うが、春日の局から事情を聞かされていた家光は英勝院の居る水戸藩に配慮し

て参勤交代を免除したのかも知れない。

有名な「忠臣蔵」に欠かせない敵役の吉良上野介は、今川・細川・一色・畠山などと同じく足利氏の流れを継承する名門であり徳川幕府からは「高家」という特別な家格を与えられていたが、格式は高くても禄高は低いので経済的に苦しい。その分は新参の大名などに江戸城内の慣例行事・作法などを教えて授業料と言うよりも「袖の下」の収入で補填する仕組みなのだが、浅野内匠頭は初めての江戸城勤務で其れを知らず、家臣にも気が利く人物が居らず、質問だけして賄賂を省略したから吉良のおじさんに冷たくされ事件を起こしたのであろう…と、勝手に推測している。

足利氏は、八幡太郎義家の孫・義康を祖として新田氏と共に下野国に土着した一族が足利庄に拠り其れを姓としたらしい。南北朝時代の当主である尊(高)氏は、鎌倉幕府の北条氏に近い立場ながら大局的見地から対立する後醍醐天皇方に味方して幕府の重要拠点・六波羅探題を攻め滅ぼし、いわゆる「建武の中興第一の功労者」になった。

ところが逃げていただけの後醍醐天皇が政治に口出しする様になったので呆れて是を見限り、頭の固い楠木正成や新田義貞らと戦って九州に逃げながらもやがて勢力を挽回し都へ戻ることにした。其の途中で「港川の戦い」に楠木正成を破った足利尊氏は、北朝系の光厳(こうごん)天皇を即位させる。其れが現代の天皇家らしいので非難される筋合いは無いのだが、どういう訳か戦時中などは足利尊氏の評判が良くなかった。

何かと話題の多い大平記も「巻第九」に入り、足利尊氏を始め、多くの人物が登場して話が複雑

化してくるが、その分だけ内容が面白くなってくると思うので、飽きずにお読み頂きたい。

○足利殿、御上洛の事

政権を握っていた北条氏に睨まれ隠岐の島に流されて居た後醍醐天皇は、各地に発生した反幕府勢力に助けられて元弘三年二月に島から脱出することができた。其の俣で静かにしていれば良いのだが脱出成功で自信がついた天皇は、武士団に対し「京都(幕府)攻め！」を偉そうに命令した。

当然、其の知らせは鎌倉に伝わり、幕府は慌てて名越尾張守など二十人の有力大名を召集し対応を協議して京都派遣を決めた。其のメンバーに、当時は治部大輔(じぶのだいふ)という正五位の地位に在る足利尊氏も入って居たのだが、風邪気味なので欠席をした。然し幕府の大事であるから重臣たちは「風邪ぐらいで休むな！」と、強引に呼び出して京都市行きを命じたのである。

体調不良の上に尊氏は父親を亡くして「喪中」でもあったから、此処で怒らないと怒る場面がなくなる…決心して北条氏に背く事にした。原本には「貴賤位を易うと雖も彼(幕府・北条氏)は(家来筋の)北条四郎時政が末孫也、人臣に下り年久し、我は源家累葉の族也、王氏(天皇の系統)を出でて遠からず…」とあるから真面目に怒った。

そうとは知らない幕府は曾我兄弟の仇討で有名な工藤祐経の子孫になる重臣を使者にして「：早く都へ行く様に：」促した。尊氏は適当に返事をして出発の準備をしかけたのだが同行メンバーに一族郎党・老弱男女全てが入り荷物も多かった。

戦場へ行くと言うよりも、まるで夜逃げをする様な集団になったから、是を怪しんで幕府重臣の長

崎入道園喜が幕府執権の北条盛時に忠告した。

「：足利殿は、上洛に際して妻子を初め一族郎党悉く連れて行くようです。此の度は合戦の応援として行くのですから戦闘要員だけの筈です。」

足利殿が何を考えておられるのか、御本人から確かめられたほうが良いでしょう…そうで無ければ起請文(謀反はしない誓約書)を出させるべきです…かつて(源平時代に)木曾義仲殿が出陣に際して其の子(清水冠者・義高)を頼朝公に差し出して忠誠を誓った例もあります…此の度は足利殿の御子息と御台(尊氏夫人)を鎌倉に留めて、更に謀反はしない誓約書も書かせるべきです…」

言われた盛時は其の通りだと思い、尊氏の許に使者を派遣して「：北条氏と貴家とは深い縁で結ばれているので疑う訳では有りませんが、貴方が行かれる京都辺りは危険ですから御家族は鎌倉に残された方が良いでしょう…」とさりげなく申し入れ、更に「周囲の者が疑いの目を向けぬように念の為に謀反はしない誓約書も書いて頂ければ有難いのですが…」と図々しく要求した。

尊氏は、心の中で怒りまくったのだが其れを顔に出さず「：追って御返事申し上げます…」と答えて使者を返した。それから弟の直義を呼んで意見を聞いた。北条氏とは絶縁する心算である。直義は人払いをしてから声を擧げて言った。

「：今、決心されたことは私利私欲の為では無く天に代わって北条氏の無道を制し不義を退ける為でしょうから一時的に北条氏に偽りの忠節を約束しても神仏はお許し下さる筈です。その策として御家族を鎌倉に残すことに御心配もあるかとは思いますが赤橋殿(高氏夫人の親で北条一族)も居られるので、何事か有っても大事には至らない

でしょう。その為に信頼の出来る家臣を少し残して置かれることは必要ですが：いづれにしても、今は相模入道（幕府執権）の不審感を取り除いてさりげなく都へ旅立たれることです：」

直義の意見に従った尊氏は夫人と嫡男の千寿王を人質に残して置く事とし、尤もらしく書いた誓約書を幕府に提出した。単純な執権殿は大喜びで尊氏を招き、盛大な送別会を開いてくれた上に、其の席で源頼朝以来、幕府に伝わる源氏の白旗を錦の袋に入れて貸してくれた。更に「：此の白旗は八幡太郎義家公以来、代々の源氏に伝えられた重寶であり、其れを二位殿（頼朝夫人政子）が実家の北条氏に伝えて来たものである。其れを貸し与えるので必ず敵を退治なされよ！」と偉そうに言つて、鞍付きの馬十頭と黄金造りの太刀を餞別に呉れた。予想外の大サーブスである。

足利尊氏も喜んだ振りをして、直義のほかに吉良・上杉・仁木・細川・今川・荒河など同族三十余騎と、親類筋四十三騎など都合三千余騎を率いて元弘三年（一、三三三）三月二十七日に鎌倉を出立した。身分としては幕府軍大手の大将である。然しながら幕府側では何となく不安なので三日後に一族の名越尾張守高家を監視役のように派遣しているが、足利尊氏軍は委細構わずに行動して四月十六日には京都に到着している。

○山崎攻めの事。

付・久我囃（なわて）合戦の事

其の頃、京都近郊では六波羅の幕府軍が少し勝ち戦さに恵まれていたので、西国の敵は恐れるに足らずと慢心していたけれども合戦が長引くと兵たちにも飽きがくる。皮肉な事に攻める劣勢の朝

廷軍よりも守る優勢な幕府軍の元気が無かった。中でも周りに勇士と期待されていた結城九郎左衛門のように敵方に転属する者も出て来る。その他、五騎、十騎と中途退職したり合戦中に年次休暇を取得したりする者も出て来て其の結果、負け戦さが続いた朝廷軍は数が増え、戦況有利な幕府軍は減ってくる：という現象が起こっていた。

その様な時期に足利尊氏が率いる精鋭部隊が到着したので幕府側は喜んだけれども尊氏は挨拶もせず伯耆国に使者を出して「天皇方に味方する」と申し入れた。喜んだ後醍醐天皇は「諸国の官軍を結集して朝敵を滅ぼすように：」と偉そうに論旨（天皇の命令書）を下したのだが、それも幕府は知らずに足利軍を味方だと思ひ込んで作戦会議などでも秘密情報も伝えてしまった。尊氏は北条一族の赤橋氏と縁組して子供も居るので、敵方に付くなどとは誰も予想出来なかつたのである。

四月二十七日には八幡・山崎で合戦が行われる事になり幕府方は名越尾張守を大手の大将として七千六百余騎の軍勢を鳥羽から向かわせ、五千余騎を率いる足利尊氏は搦め手の大将を命じられて西岡に陣を布いた。是に対して八幡・山崎に居た官軍は難所で敵を迎え討とうと千種頭中将（天皇側近を兼ねる将軍）が五百余騎で大渡橋から赤井河原に回り、結城九郎左衛門親光は三百余騎で狐川の邊に向かった。また、赤松入道圓心は三千余騎で淀、古河、久我囃の三か所に布陣した。是らの軍勢は強敵に負けない気力は十分だが、兵力が少ないから誰が計算しても頼りなく思われた。

そうした中で、誰言うとも無く「足利尊氏軍が寝返る？」と言う噂が聞こえ始めてきたので朝廷軍の坊門少将が是を支援しようとして地元の野武士五、

六百人をアルバイトとして雇い岩蔵辺りに向かわせたが、足利尊氏の軍勢は既に京都を出ていた。

一方、幕府軍としては足利軍に寝返られたのは一大事なので、大手軍の大将・名越尾張守が後を追う様にして合戦場の久我囃へ向かった。其処は馬の脚も立たない深田なのだが功名心に逸る尾張守は馬の都合も考えず飛び込んで行つた。然も晴れの舞台を意識して鎧兜から馬の鞍まで飾り立てていたから重い。気の毒な馬は必死で泳ぐしかないが、魚類では無いから動きは鈍い。其の状態は目立つので、敵方も地味な兵士よりも尾張守を狙つて来るが、尾張守は近づく敵を退けつつ大勢が待ち構える敵陣へと向かつて行つた。

迎え撃つ官軍の中に赤松一族の佐用左衛門三郎範家と言う弓の強さを誇る武士が居り、鎧兜を着けず兵卒並みの格好で田の縁に伏せて獲物（敵）を狙っていた。其の場所に泥田から抜け出した名越尾張守殿が汚れながらも颯爽と現れ、近くには敵が居なかつたので太刀の血を拭い顔に風を当てていた。佐用から見れば格好の獲物なので狙いを付けて矢を放つた。距離が近いから矢も勢いがあり尾張守は顔を射られて落馬した。猛将でも勇者でも是は助かる道が無い。佐用は周囲に向かつて大声で「寄せ手の大将を一矢で倒した」ことを宣伝したので、是を聞いた官軍は急に元気が出て、三方から勝鬨を上げて攻め直しすることにした。射殺された尾張守には七千余騎の部下が居たのだが「総大将が討たれたのでは：」と諦めて退却する者、後を追う様に戦つて討死する者、深田に落ちて馬と共に泥に沈む者、自害する者などがあり戦場となつた場所五十余町は死者で埋もれた。

（続く）